

インドネシアに出店したお好み焼き店の「徳川」。
行列ができる人気店となっている(今井観光提供)



お好み焼き・ラーメン・パン店

東南アジアに出店続々

個人消費 伸び期待

中国地方の飲食チェーンなどが、東南アジアへの出店を加速させている。経済成長が続き、個人消費の伸びが当面見込めることが進出の決め手となっている。現地の食文化にも配慮したメニューの評判は上々で、さらなる出店計画を練る動きも活発だ。(村上和生)

お好み焼き店「徳川」を展開する今井観光(広島市中区)は、初の海外進出先にインドネシアを選んだ。イオンモール(千葉市)がジャカルタ近郊に開業した商業施設に6月、出店した。来店客は月5千〜6千人と目標の3倍に上る。客の目の前の大きな鉄板で焼く手法に人気広がった。

同国の人口は約2億5千万人と日本の2倍。田中成雄常務は「高齢化が進む日本や中国とは違い、長期にわたり幅広い年代の集客が見込める」と市場の魅力を説明する。イスラム教徒向けに豚肉を牛肉に替えるなど、食材や調味料にも気を配る。将来は現地企業との

合弁やフランチャイズ(F/C)で20店を目指す。ウイズリンク(安佐南区)はことし、ジャカルタとマ

レーシアのクアラルンプールにラーメン店「ばり嗎」を計3店開き、東南アジアの店を6店に倍増させた。東南アジアには2012年、シンガポールに直営で進出した。各店の売り上げは月700万〜800万円と目標を超えている。

12月にはジャカルタに3店目を予定。さらにフィリピンへの進出も計画する。今後は豚肉の代わりに鶏肉を使う新業態の店も開き、イスラム教徒の顧客獲得も狙う。

従業員の人件費の安さも今は有利に働いている。経済成長とともに上昇が予想されるが、江口順爾常務は「日本から運んでいるス

ープのもとを現地で作るなど、コスト削減策を検討する」と攻め続ける考えだ。

パン製造販売の八天堂(三原市)は5月、主力のスイーツ風のクリームパンを売る2店をフィリピンに開いた。海外店は韓国に続いて2カ国目。「スイーツ市場は拡大の余地が大きい。さらに多くの国に広げたい」とする。

アンデルセングループ(中区)は7月、菓子パン専門店「デニッシュバー」をフィリピンのマニラに出店。パン店のリトルマーメイドを含め、東南アジアの店舗網はフィリピンとタイで計4店に広がった。